「よいドイツ語」とは何か？

—文法規範と言語慣用—

佐藤　恵

1.　はじめに

Armin Burkhardt が編集した論文集„Was ist gutes Deutsch? Studien und Meinungen zum gepflegten Sprachgebrauch“ (2007) に集められた、「よいドイツ語」に関する 30 篇の論文を読んでみると、「よいドイツ語」であると判断される際の基準が実際にはさまざまに存在することが如実にわかる。「よいドイツ語」は時代によって異なり、テクスト種類（話しことば性の高いテクストーメールやツイッターなど versus 書きことば性の高いテクストー新聞、学術論文、法律など）によっても異なる。文法的に見て正しいドイツ語（規範に則ったドイツ語）が果たして常に「よいドイツ語」と言えるのか、逆に言うと、文法規範から逸脱していてもそれが固定し慣用化されている用法（zu を伴わない brauchen、定動詞第二位の weil 文など）を一義的に「悪いドイツ語」と判断することが妥当であるのか、という問題が見えてくる。本論文では、「よいドイツ語とは何か？」について検討することによって、文法規範と言語慣用の関係性について考察を行いたい。

2.　「よいドイツ語」の基準

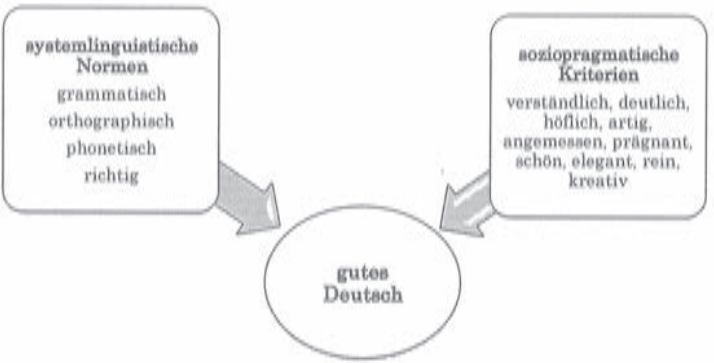
「よいドイツ語」、「正しいドイツ語」の基準とは何だろうか。19 世紀初頭において「よいドイツ語」と言われた場合はたいてい、書きことば (geschriebene Sprache) が念頭に置かれていたのであり、18 世紀末の作家や哲学者、作家の言語形式が「よいドイツ語」であるとされていた。[1)]

1)　「19 世紀当時、母語話者が規準 (Standard) としたのは、語学の授業や読み物として適切であるとされていた書籍、雑誌、新聞だったのであり、その際話しことばとして模範とされるもの（教会での説教や講演）はあまり有用ではなかった。なぜなら書籍や新聞は遠いコミュニケーション (Distanzkommunikation)、特に書簡、新聞、学術論文といった文字媒介のコミュニケーションに役立ったからである。一方近いコミュニケーション

しかしその後テクスト種類が多様化していくなかで、とりわけ 1960 年代末の「語用論的転回」(pragmatische Wende) を機に話しことばの研究に焦点が当てられるようになって以降、「よいドイツ語」の基準もさまざまに変化してきた。

2004 年に出版された Bastian Sick の„Der Dativ ist dem Genitiv sein Tod"（『与格は属格の死を意味する』）がベストセラーになった。この事実は、「よいドイツ語とは何か？」という問いに、いかに多くの人々が関心を持っているかを裏付けている。[2] この本は、Burkhart (2007) に収められた論文の中で多く引用されている。「よいドイツ語」の基準は、今日においてもドイツ語を自由に操ることができる母語話者から、また言語学を専門としない人々からも求められているのである。

図 1　体系言語学的規範と社会語用論的基準



(Nahkommunikation) としての日常会話 (Alltagsgespräche) は、方言色が強い日常語 (Umgangssprache) であった (Cherubim 2007: 36f.)。

2) Diekmannshenke (2007) が自身の論文の中で言及しているシュピーゲル誌の記事 „Deutsch for sale"では、一般の読者にむけて次のようなアンケートを行っている。そこには、〈よいドイツ語について〉：質問「書きことば、話しことばにおいて、正しくよく表現できるということはどのぐらい重要か？」；回答「(とても) 重要だと思う 98%」、「(全く) 重要でない 2%」。〈混成語 Mischwörter について〉：質問「‚brainstormen',Automaten Guide'のようなドイツ語と英語が混ざった表現は避けた方がよいか？」；回答「はい 74%」、「いいえ 23%」。〈英語の表現について〉：回答「ドイツ語の語彙を豊かにしてくれるもの 27%」、「大体において過剰なもの 66%」(Spiegel 2.10.2006: 185, 187, 188) と記され、一般読者の言語意識の高さ、外国語に対する保守的な態度が見て取れる。

「よいドイツ語」に関して、Burkhardt (2007) の中に収められた 30 篇の論文ではさまざまな定義がなされている。これらの論文で„gutes Deutsch"が言及される際に„gut"と同義のものとして扱われている形容詞を抜き出してみて、それを Lochtmann (2012)[3] のモデルに従って 2 つの基準に分類したのが図 1 である。

体系言語学的規範 (systemlinguistische Normen) では、文法、正書法、音韻における正しさが求められる一方、社会語用論的基準 (soziopragmatische Kriterien) では、テクスト種類によって「わかりやすさ (Verständlichkeit)」、「丁寧さ (Höflichkeit)」、「適切さ (Angemessenheit)」、「簡潔さ (Prägnanz)」、「美しさ (Schönheit)」、「上品さ (Eleganz)[4]」、「(外国語の要素のない) 純粋さ (Reinheit)[5]」、「創造性 (Kreativität)」などが「よいドイツ語」の条件となっている。「体系言語学的規範＝学校における言語規範」、「社会語用論的基準＝実践における言語慣用」ととらえておくこともできるだろう。この 2 つの規準を出発点として次章以降、具体的な例を挙げながら「よいドイツ語」のあり方について検討していきたい。

3. 体系言語学的規範

ここでは体系言語学的規範、つまり文法、正書法、音韻における正しさの基準から逸脱している例、いわゆる「ことばの揺れ」と言われる現象について検討する。

---

3) Lochtmann (2012) は「言語学的規範 (linguistische Norm)」と「社会言語学的規範 (soziolinguistische Norm)」の二分法を採用しているが、ここでは体系言語学的規範、社会語用論的基準のように一部名称を改変した。前者、つまり文法・正書法・音韻は「場面や文脈から切り離された、独立した言語体系・システム」であるので「体系言語学」という名称が適切であり、後者は「場面や文脈における社会的活動としての言語使用」(例：年上の人に敬語を使う、など) も含むので「社会語用論」という名称がふさわしいと考えたためである。

4) 文体 (「美しい」、「上品な」ドイツ語) は、どんな状況で発話するのか、誰に向かって書くのか、また何の目的で書くのかによって変わるという意味で、語用論的事項だといえる。

5) 「純粋なドイツ語」とは、「古めかしく田舎くさい („provinziell") 語彙、外国の語法上正しくない新しい語彙」を排除したドイツ語本来の語彙、表現を指す。また外国語的要素の他に、「土着の古風な表現 (einheimisiche Archaismen)、方言語法、『野卑な』社会集団語的要素」も避けられた。アーデルングは文体論についての著作„Über den Deutschen Styl" (1785) の中で「すでにできあがった文章語は、語法上正しく且つ純粋に、話され、書かれなければならない。」と述べている。(以上、Takada 2007: 20 による。)

3.1.　文法規範からの逸脱

Eroms (2007) は文法規範からの逸脱として、Bastian Sick の„Der Dativ ist dem Genitiv sein Tod"で取り上げられている例を挙げながら論じている。具体的には、1) zu のない brauchen、2) weil+定形第二位、3) 2 格の衰退である。

3.1.1 zu を伴わない brauchen

日常語においては、müssen や dürfen などの話法の助動詞と同様に、brauchen が不定詞（zu を伴わない不定詞）と共に用いられる。Duden (2007) によれば、「話しことばでは不定詞の前の zu は省かれ、müssen, dürfen, können, sollen, wollen, mögen などの話法の助動詞と同じように不定詞と直接結びつく」（Duden 2007: 185）。このような用法に関して文体家 Gustav Wustmann（1844-1910）は 19 世紀末に、「zu を伴わない brauchen は下品な方言的用法である」と断じていた (Eroms 2007: 93) が、2007 年時点においては、インターネットで（「真面目な」サイトでも）Du brauchst nicht weinen.「泣くことはないよ。」、Sie brauchen nur anrufen.「電話をしさえすればよいのです。」のような例はかなり多く見受けられると報告されている。さらに Eroms (2007) によれば、レーゲンスブルク大学の退学届用紙にも、次のような zu のない brauchen の用法が確認できるという：

(1) Bei Exmatrikulation zum Ende des Semesters **brauchen** die Studienunterlagen nicht zurückgegeben werden. (statt: **brauchen**... zurückgegeben **zu** werden)[6]
(Exmatrikulationsformular der Universität Regensburg: Eroms 2007: 93)

3.1.2 weil＋定形第二位

Duden (2007) の„weil"の項をみると「標準的な用法では、動詞（定形）は従属接続詞が導く副文の最後に置かれるが [(2) Sie kann nicht mitkommen, **weil** sie keine Zeit <u>hat</u>.][7]（定形後置）、話しことばにおいては文の第一成分の後に動詞が置かれる [(3) ..., **weil** sie <u>hat</u> keine Zeit.]（定形第二位）。」（Duden 2007: 996）とあり、さらに次のような例が挙げられている：

6) (statt:...)、強調は筆者による。以下同様。
7) 例文中の下線は筆者による。以下同様。

(4) Ich habe die Gesellenprüfung, aber die hab ich nicht da gemacht, **weil** in Bayern ist die Gesellenprüfung schwieriger als bei uns in Baden-Württemberg. (Duden 2007: 996)

(5) Wir sollten jetzt reingehen, **weil** es regnet ziemlich stark. (Duden 2007: 624)

weil のあと定形第二位となる場合は、weil の後に間[注](Pause)を置くことが多い：

(6) Da muss wohl eine Baustelle geplant sein, **weil** – da wurde schon eine Umleitung eingerichtet. (Duden 2007: 996)

ただし「標準的な書きことばにおいてはこのような語順(weil+定形第二位)は正しくないとみなされる」とされており、「書きことばにおいて weil は従属接続詞として、話しことばにおいては従属接続詞および並列接続詞として用いられている」とある(Duden 2007: 996)。Heringer (1989)も同様に、「話しことばにおいては weil＋定形第二位という形を用いることが多いが（例：Ich muß gehen, **weil** ich kann das nicht mit ansehen.)、書きことばでは用いるべきではない」(Heringer 1989: 165)としている。Elspaß (2005)によると、「weil＋定形第二位」は 20 世紀における言語変遷の過程で初めて確認される現象ではなく、すでに 19 世紀において、書かれた日常語の中にその用例(weil＋定形第二位)が見られる。[8] なお Eroms (2007)は

8) 19 世紀半ばにドレスデン近郊で書かれた請願書が引用されている：**wailn** Ich bedarf der Erztlichen Hülfe (nach Hünecke 1996: 248: Elspaß 2005: 301) ドイツからアメリカに渡った移民の書簡にも定形第二位語順の weil が使用されている(Elspaß 2005: 296-316)。さらに Elspaß が資料とした書簡の中では、「比較級のあとの wie (標準では als)」、「前置詞 wegen の与格支配（標準では属格支配)」も確認されている（高田 2009: 38)。als wie が重複して用いられる例、「比較級のあとの wie」の例を次に挙げる。(強調は著者による。以下同様。)
daß doch des Vaters Auge weiter sieth, gewöhnlich, **als wie** das des Sohnes […] er würde vielleicht beßer ausmachen **denn** ich […] er wird ein guter americaner abgeben, beßer **wie** ich, weil er, trotz seines guten benehmen gegen mich, beßer zu sich nehmen kann **wie** ich […] (Friedrich Martens: 18.04. 1858: Elspaß 2005: 290)
次に挙げるのは「wegen の与格支配」の例である。Auch habe ich in eurem Brief ersehen, daß ihr sehr bekümert seyd über mich **wegen dem Krieg** in Amerika.[…] Auch habe ich ersehen, daß

weil にあたる中高ドイツ語の接続詞 wande は、主文とも副文とも共に用いられていたことに言及しているが[9]、次に挙げる例は、定形第二位語順と定形後置語順の weil 文が連続して現れる現代の用法である：

(7) Da sag ich: Das ist kein Geschäft, **weil** da reib ich mir mehr von den Schuhsohlen herunter. [...] Und **weil** jetzt keiner mehr gelacht hat, ist er unzufrieden gewesen. (Haas[10] 2001: 49: Eroms 2007: 94)

同様に接続詞 obwohl も上述の weil と同じ振る舞いをし、定形第二位の語順で使用されることがある[11]：

(8) „Ein Bier", sagt der Brenner, **obwohl**, normalerweise hat der um die Zeit noch kein Bier getrunken. (Haas 2001: 62f.)

(9) Sogar die Leuchtziffernmalerinnen haben ihm jetzt leid getan, **obwohl**, die hätten ja sowieso heute nicht mehr gelebt. (Haas 2001: 123)[12]

---

ihr sehr in Angst seid **wegen dem,** daß die Mutter hören Rufen hat und an die Thür geklopft wurde. Es hat ihr vielleicht geträmt. (Wilhelm Schöpfle, 14.04.1861: Elspaß 2005: 321)

9) ハルトマン・フォン・アウエの『哀れなハインリヒ』から、中高ドイツ語の接続詞 „wande"（別形：wan）「なぜならば～だから」が主文、あるいは副文と共に用いられている例を次に挙げておく。[接続詞＋定形第二位の例]：Ein wênic vreute er sich doch / von einem trôste dannoch: / **wan** im wart dicke geseit / daz diu selbe siecheit / wære vil mislich / und etelîchiu genislich.「こうなっても、まだ彼が、わずかながら望みをつなぐことができたのは、この病気にはいろいろあって、なおるものもある、とたびたび人に聞かされたからである。」（wart...geseit = wurde...gesagt.）（『哀れなハインリヒ』163-168: 19）
[接続詞＋定形後置の例]：Diu maget lachende sprach, / **wan** si sich des wol versach, / ir hülfe des tages der tôt / ûz werltlîcher nôt:「少女は笑みを浮かべた。死にさえすれば、その日のうちに、この世の苦しみから救われる、とかたく信じていたからである。」（sich...versach = sich...versehen）（同上 1107-1110: 136）

10) Wolf Haas（1960～オーストリアの推理小説作家）の小説では、weil＋定形第二位、weil＋定形後置が、同一ページ内でも混在している。ドイツ南部の日常語では weil を主文語順で用いる傾向がある、という指摘がある（Eroms 2007: 94）。

11) „Richtiges und gutes Deutsch"（2007）には、obwohl が副文同様、定形第二位となるという記述はない。

12) 同じハースの作品でも、weil の場合とは違い、obwohl はほぼ常に副文と共に用いられている。obwohl が定形第二位で用いられている例はわずかしかなく、定形第二位の語順で使用される際には必ずコンマを伴っている。

以上のような「weil, obwohl＋定形第二位という、規範に反する用法」は典型的な話しことばの特性を表していると言えるが、このような現象は書きことばにも転用され、新聞にも主文語順が用いられている(Betz 2006: 124f.)。[13] 以前は文芸欄でしか見られなかった定形第二位語順の weil が、書きことばの世界でも「きちんと認知される(salonfähig)」ものとして受け入れられるようになったと考えられる(Betz 2006: 125)：

(10) **Weil**, die Freaks <u>machen</u> die besten schlechten Filme der Welt!
(Frankfurter Rundschau, 16.11.2001: „Walters Wochenende", S.32: Betz 2006: 124f.)

(11) **Weil**, heute <u>ist</u> ZDF dran am Übertragen und nicht Sat 1, wie am vergangenen Sonnabend." (Welt, 14.11.2001, „Haijajahei" : Rudi, der alte Fisch und das Schicksal der Fußballnation, S.29: Betz 2006: 125)

(12) „**Obwohl**: Lustig <u>ist</u> das schon" (Welt, 15.11.2001, Schwanken zwischen Angst und Albernheit, S.29: Betz 2006: 125)

3.1.3 格の逸脱

Sick の著書„Der Dativ ist dem Genitiv sein Tod" (statt: Der Dativ ist der Tod <u>des Genitivs</u>) のタイトルにうかがえるように、今日では2格の代わりに3格が用いられる例が多く見られる（例：前置詞 wegen, laut, statt, trotz など)。このような2格の衰退[14] は新聞にも見られ、次の例では **js./et²** gedenken「～のことを思い出す、(故

13) Betz は weil, obwohl の他に、副詞 allerdings の後に主文が続く例も挙げている(Betz 2006: 124)。„**Allerdings**: Das <u>tut</u> Levin nur im Film." (Süddeutsche Zeitung, 19.7.2001, Die Carrera-Bahn., S.17: Betz 2006: 138)

14) 「属格(2 格)の減少は現代ドイツ語に特徴的な事象ではなく、14 世紀頃に始まる長期にわたる統語変化の一つである」という指摘がある（荻野 2012)。「ドイツ語において属格は全般的に減少する傾向があるが、それでも標準語において、特に法律語のような官庁語において、属格が維持されているのは、標準化が『話し言葉や日常語とは無縁に』(von Polenz 1983:8) 進行してきたことの表れである。つまりドイツ語の標準語は、ある特定の地域の方言・話し言葉から生まれたものではなく、逆に『書き言葉を話す』(Sprich wie du schreibst!) というプロセスを経て生み出されたものであった。したがって標準口語

人を）しのぶ」という 2 格目的語が 3 格目的語で代用されている：

(13) Gedenken an die Opfer der Völkerschlacht von Leipzig

Vom Feiern geschwächt ist ein Darsteller eines französischen Soldaten beim Gedenk-Appell zur 190-Jahr-Feier der Völkerschlacht auf dem Leipziger Marktplatz. Teilnehmer aus 19 Ländern **gedachten** 190 Jahre nach der Niederlage des französischen Kaisers Napoleon den Opfern (statt: der Opfer) dieses Krieges.

(Braunschweiger Zeitung Nr. 244 v. 20. Oktober 2003, S.2: Burkhardt 2007: 12)

また **eines Dings** vergessen / **etwas** vergessen のように2格目的語が4格に、sich[4] **einer Sache** erinnern/ sich[4] **an eine Sache** erinnern「何[2]／何[4]を思い出す、覚えている」のように2格目的語が前置詞目的語に取って代わられる例もある。もっとも、4格に変わった例はそれほど多くなく、大半は前置詞目的語となった。このような2格の衰退の他に、4格目的語を2つ支配する動詞 lehren の目的語のうち、一方（人の4格）が3格に取って代わられることがある：

(14) Dass der Chef der SPD-Fraktion im Bundestag freiwillig auf seine BMW verzichtet, zeigt, dass er Wichtigeres zu tun hat: Peter Struck muss den Arbeitgebern (statt: die Arbeitgeber) das Fürchten **lehren**.... (Die Welt v. 30.7. 2001, S.3: Burkhardt 2007: 12)

には多くの書き言葉的特徴、言い換えれば保守的で規範的な特徴（従属構造、枠構造、冠飾句など）が多く観察されるが、属格も標準ドイツ語成立過程の特殊性の一つの反映と考えられよう。」（荻野 2012）

属格の後退傾向に対する「文法家たちの態度には、ショッテルやベーディカーに見られるように、古い用法を規範としておきながら、実際、自らは新しいものを用いるという矛盾があった。ゴットシェートやアーデルングなどはどちらも認めるという寛容な立場で、アーデルングは辞書記述の中で、属格を『古風な用法』または『高尚な用法』としていることが多かった。gebrauchen や vergessen など、アーデルングが、属格以外の目的語使用を『時代に典型的な現象』としていた動詞は、現代ドイツ語ではもはや属格とともに用いられることはなく、属格以外の目的語をとる用法で定着している。」（須澤・井出 2009: 240）

ただし、jn. et[4] lehren「（～に～を）教える」という形はやや古い用法であり、現在では「人の4格」の代わりに3格を用いることが多い。[15] 確かに「二重対格をとる」という文法規則からは逸脱しているが、誤用とは言い難い。

次に挙げるのは男性弱変化名詞（例：der Präsident, der Patient）の3、4格の格変化語尾(-en)、外来語（例：der Kaffee)、国名（例：Islam）の2格の格変化語尾が落ちる例(Kasus Verschwindibus)である。これらはSickによって厳しく批判されている現象ではあるが(Sick 2011: 297f.)、語尾が消失することで文意が変わり、誤解を生じさせるものではない(Burkhart 2007: 12)：

(15) Er begrüßte **den Präsident** (statt: den Präsidenten). (Burkhart 2007: 12)

(16) **Dem Patient** (statt: dem Patienten) geht's gut. (Sick 2011: 297)

(17) Die Kulturgeschichte **des Kaffee** (statt: des Kaffees) (Sick 2011: 298)

(18) Die Geheimnisse **des Islam** (statt: des Islams) (Sick 2011: 298)

3.1.4 複合語に対する不適切な付加語修飾

ドイツ語は造語能力の高い言語であり、2語、3語以上からなる複合語を形成することができる。複合語は2つの構成素から形成され、基礎語と、その意味内容をより詳しく限定する規定語から成っている（例：Haustür〈玄関のドア〉＝ Tür des Hauses / Haus＝規定語、Tür＝基礎語)。この複合語に対して、意味上不適切な修飾関係で付加語が修飾されている例が少なくない：

(19) Der <u>vierstöckige Haus</u>besitzer「4階の家主」(statt: der Besitzer eines vierstöckigen Hauses) (Burkhardt 2007: 13)

本来、基礎語(Haus)を修飾するはずの付加語（形容詞: vierstöckig）であるが、規定語(Besitzer)にかかっている。これは誤用としてもっとも典型的な例であり、

15) 二重対格をとる動詞はわずかしかないが、そのうちkostenはlehrenと同じく、人の4格の代わりに人の3格も用いられる。例：Das hat mich［mir］viel Mühe gekostet.「私はそのためにたいへん骨を折った」

すでに19世紀後半、このような用例は Wustmann によって批判されている(Wustmann 1891:212)。同じような例に、„Russischer Botschafterwechsel in Bonn"がある。ここで問題になっているのは「ロシア大使の交代」(der Wechsel des russischen Botschafters)なのであって、「ロシアの交代」ではない(kein russischer Wechsel)(Burkhardt 2007: 13)。

(20) Beendigungswunsch des Verkaufsgesprächs durch die Verkäuferin (statt: Wunsch nach Beendigung des Verkaufsgesprächs durch die Verkäuferin) (Burkhardt 2007: 13)

2格の付加語(des Verkaufsgesprächs)が規定語(Wunsch)にかかっている。売り込みの商談を終わらせたいのは店員なのであって„Wunsch des Verkaufsgesprächs"では意味をなさない。同様の例として Wustmann(1891)は、„der Anzeigepflicht der ansteckenden Krankheiten"「伝染病の告知義務」(正しくは 2 格の付加語 der anssteckenden Krankheiten は Pflicht ではなく Anzeige を規定)を挙げている。

(21) 100 Stück Kinderhemden von 2 bis 14 Jahren (statt: 100 Stück Hemden für Kinder von 2 bis 14 Jahren) (Wustmann 1891: 212)

前置詞句(von 2 bis 14 Jahren)が規定語(Hemden)にかかっている例である。2歳から14歳というのはもちろん「子ども」であって、「シャツ」ではない。同じような例として、„alarmierender Vertrauensschwund in die Politik"(=ein alarmierender Schwund des Vertrauens in die Politik)がある。前置詞句(in die Politik)が修飾するべきは Vertrauen「(政治に対する)信頼」であり、Schwund「消失」ではない(Burkhardt 2007: 13)。

以上のような「付加語修飾における文法規則からの逸脱」は、特にメディアにおいてのみならず、学術論文、日刊新聞、小説などにおいても多く見受けられると指摘されている。新聞の見出しなどで短い表現にしようとするあまり、このような「文法規則の違反」が起こるのである(Burkhardt 2007: 13)。実際に新聞に掲

載された例として、次のような文もある：

(22) „Im **Mordprozeß aus Fremdenhaß gegen Skinheads** ist der 25 Jahre alte Hauptangeklagte zu lebenslanger Haft verurteilt worden." (Braunschweiger Zeitung 14.5. 1993: Burkhardt 2007:13f.)

ここで話題になっているのは「(外国人への憎しみの感情から) 人殺しをしたスキンヘッドに対する訴訟」なのであるが、„aus Fremdenhaß"という句が挿入されていることで文意がわかりにくくなっている。„gegen Skinheads"という付加語がどこにかかるのか(„Im Mordprozeß gegen Skinheads"「スキンヘッドに対する訴訟」なのか、„aus Fremdenhaß gegen Skinheads"「スキンヘッドに対する憎しみの感情から(殺人に及んだの)か」)はっきりしないからである。ここで問題になっているのは「正しいか間違っているか」ではなく、一読して文意が容易にとれるかどうか、という「わかりやすさ」の基準である。確かにこのような理解しづらいドイツ語は「悪いドイツ語」(schlechtes Deutsch)だと言えるが、新聞ではなくて他のテクスト種類であれば、あるいは言語の使用状況が違えば、必ずしも「悪いドイツ語」とは言えない。つまり同じ物差しでドイツ語の良し悪しを語ることはできないのである(Burkhardt 2007: 14)。

3.2. 文法規則の乱用

同様に、文法的には正しいが、わかりづらい例として、次のような複雑な文構造、2格の乱用が挙げられる：

(23) Wenn man, beim Aufsteigen in der Reihe der Erscheinungen, wider das Dasein einer schlechthin notwendigen obersten Ursache, Schwierigkeiten anzutreffen vermeint, so müssen sich diese auch nicht auf bloße Begriffe vom notwendigen Dasein eines Dinges überhaupt gründen, und mithin nicht ontologisch sein, sondern sich aus der Kausalverbindung mit einer Reihe von Erscheinungen, um zu derselben eine Bedingung anzunehmen, die selbst unbedingt ist, hervorfinden, folglich kosmologisch und nach empirischen Gesetzen gefolgert sein. (Imma-

nuel Kant[16]: Kritik der reinen Vernunft, A 457: Eroms 2007: 91)

(24) Der Antrag der Angestellten der untergeordneten Behörde der Stadtverwaltung (Eroms 2007: 91)

(23)の例に見られるような複雑な文構造は哲学テクストに、(24)のような2格の乱用は官庁関係のテクストに特徴的だといえる(Eroms 2007: 91)。いずれも文法規則に則った文ではあるものの、わかりやすい文とは言えない。Ludwig Reiners は、「18 世紀には『威信がある(ruhmvoll)』とされていたという、長く入り組んだ複雑複合文」を「長ったらしい文」、「箱入り文[17]」、「数珠つなぎ文(Kettensätze)」(Reiners 1943: 86ff.)だとして厳しく批判し、悪い例として、詩人 Christian Morgenstern (1871-1914)の戯作(Parodie)を引用している：

(25) Es darf daher getrost, was auch von allen, deren Sinne, weil sie unter Sternen, die, wie der Dichter sagt: ‚versengen statt leuchten', geboren sind, vertrocknet sind, behauptet wird, enthauptet werden, daß hier einem sozumaßen und im Sinne der Zeit dieselbe im Negativen als Hydra gesehen, hydratherapeutischen Moment ersten Ranges – immer angesichts dessen, daß, wie oben, keine mit Rosenfingern den springenden Punkt ihrer schlechthin unvoreingenommenen Hoffnung auf seine, sagen wir, wesentliche Erweiterung des natürlichen Stoffgebietes zusamt mit der Freiheit des Individuums vor dem Gesetz ihrer Volksseele zu verraten sich zu entbrechen den Mut, was sage ich, die Verruchtheit haben wird […] (Christian Morgenstern, zit. nach Reiners 1943: 105: Eroms 2007: 91f.)

16) カントついての記述は Reiners(1943)、Klarheit の章(S.260f.)に詳しい。さらにライナースは『文体論』の中で、„Nur einer meiner Schüler hat mich verstanden, und der hat mich falsch verstanden."「私の弟子のうちで私を理解してくれたのはたった一人で、そのたった一人の男も私をまちがって理解した。」というヘーゲルの言葉と伝えられているものを紹介している (Reiners 1943: 265)。

17) 「均整のとれた『美しい複雑さ』は、ある場合には肯定的に評価されうるが、次例のように階段文(Treppensatz)状になってしまった場合にはもはや一読して理解するのは困難となる。例：Der Mann, der mit dem Auto, das er gestern gekauft hat, fuhr, starb.（きのう買った車を運転していた男は死んだ)」(川島 1994: 826)

(25)の例は、際限なく文を拡張できるドイツ語の特徴をよく示している。[18] 挿入句が多くなり、文が長くなると、どの語がどの語を修飾しているのかわかりづらくなり理解が難しくなる。文法規則を遵守することに固執すると、しばしば適切さ(Angemessenheit)という基準が忘れられがちになるという「落とし穴」(Gefahrenquelle)を示す例だといえる(Eroms 2007: 92)。

4. 社会語用論的基準

前章で述べた体系言語学的基準が規範文法に則ったものである一方、社会語用論的基準は「観察的立場」に立った記述文法と同じ方向性をもつものである（南 2009: 32)。つまり社会語用論的基準においては「規則ありき」ではなく、さまざまなテクスト種類もしくはジャンルにおいて、それぞれにふさわしい表現方法や型が存在していると考えられる。

4.1. 意図的な文法的逸脱

4.1.1 広告

例えば広告テクストにおいては多くの場合、意図的な文法的逸脱が見受けられ、この逸脱によって読者の注意を喚起して、関心を惹くために意識的に「ずらし」が行われていると考えられる：

(26) Da werden Sie geholfen. (statt: Da wird Ihnen geholfen) (Sick 2001: 377f.)

(27) Deutschlands meiste Kreditkarte (Krischke 2012: 103)

(28) Das König der Biere (Krischke 2012: 103)

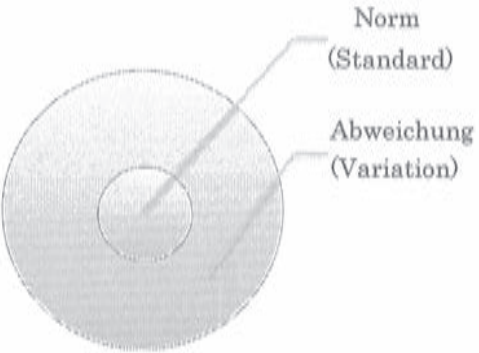
(29) Besser als wie man denkt! – Erfahrungsbericht über Apple IPOD Shuffle (Krischke 2012: 125)

(26)の受動文では3格目的語(Ihnen)であるべきところが、1格(Sie)となっている。(27)では meist という最上級の形容詞が、複数形ではなく単数形 Kreditkarte

18) 長くわかりづらい文章については「明確さを欠く」として、すでに18世紀の文法家からも批判されていた。「十八世紀の文法家である Gottsched(1748)も Adelung(1782)も、大きすぎる枠構造を『官庁文体』とし、そのわかりづらさを非難し、『明確さ』を意識するべきだとした。」（高田 2009: 39）

にかかっている。(28)では der König という男性名詞に（おそらく das Bier の類推から）中性名詞の冠詞 das が用いられている。(29)は、als、wie という接続詞が一緒に用いられている例である。

図 2　規範と逸脱



異化作用が働くためには、共通の規範(型)が共有されていることが前提条件となる。つまり広告では「計算された逸脱」が行われているのだが、広告として成功するには、それが「意図的な誤り」であると受け手に認識されなければならない(Krischke 2012)。異化効果が十全に働くためには「日常」言語とは著しい対照をみせる「特殊な」言語が必要であり、何が逸脱であるかをつきとめるためには、逸脱を生じせしめる規範の存在が確認できるという前提がなければならないのである（イーグルトン 1997: 8)。

また広告のドイツ語には„unkaputtbar“[19] といった新語(Neologismus)も見受けられる：

(30) „in der unkaputtbaren Mehrwegflasche“ (Janich 2010: 154)

これは 1990～1992 年、コカコーラがリサイクルペットボトルを導入した際に使用された広告であるが、ここにも意図的な逸脱が見受けられる。un-という接頭

19) „Richtiges und gutes Deutsch“（オンライン版）には„Werbesprache“(Häufigkeit▮▮▯▯▯)として収録されている。(http://www.duden.de/rechtschreibung/unkaputtbar)

辞は、接尾辞-bar と共に「動詞・名詞から派生した形容詞」につくのが通例であるが（例：unannehmbar「受け入れがたい」）、„kaputt"は動詞や名詞から派生した形容詞ではない。さらに„kaputt"という語自体、否定的な意味をもつ形容詞である。しかしこのような逸脱は人々の注意を喚起し、自転車の広告でもその流れを汲むものとして、同じ構造の形容詞„unplattbar"が使用されている（Sobotta 2007: 80）。

4.1.2 ツイッター

ツイッターのドイツ語でも同様に、意図的な逸脱、つまり主語の省略が行われている：

(31) Uff, bin auf den Tag genau 5 Jahre bei Twitter angemeldet. ... I love it. :-)
(Moraldo 2012: 105)

(32) Freu mich so auf heute Abend ;))) ; Hey Bro, alles easy! Reg dich nich auf! Bin am Chillen! (Moraldo 2012: 104)

(31)、(32)のような主語の省略は、ツイッターや携帯メールでは多く見られる。Moraldo（2012）はツイッターを「文字ベースのネットメディア版日記」„schriftbasierte virtuelle Tagebücher"と言い換えているが（Moraldo 2012: 104）、このような主語の省略は「昔から日記は ich を書かないのが通例であった」ということと関係していると推測される。このような省略が行われたとしても、コミュニケーションの成立になんら問題はなく、文全体の明瞭性にも全く影響はない。「わかりづらい（誤解を生むような）ドイツ語」が悪いドイツ語というのなら、(30)、(31)、(32)の例は文法規則から逸脱したドイツ語ではあっても、「悪いドイツ語」とは言えないだろう。

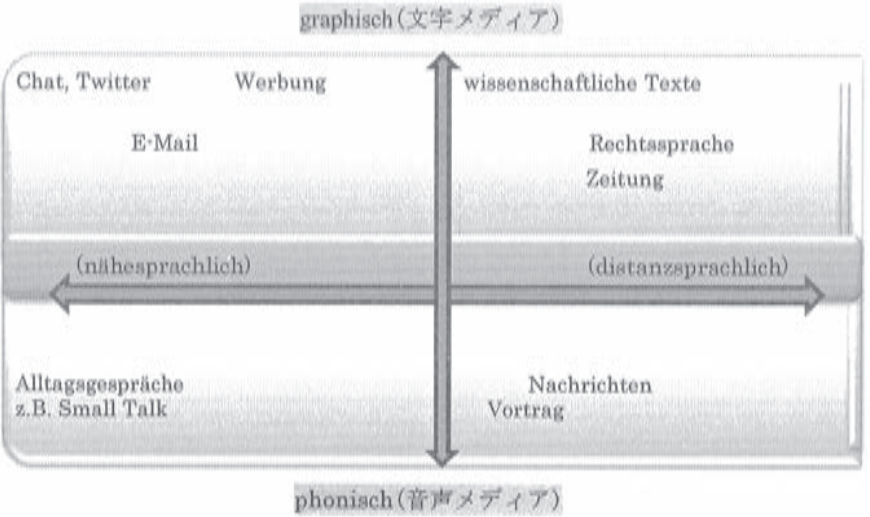
4.2. さまざまなジャンルとテクスト種類

4.2.1 ジャンルによる送り手と受け手の遠近関係

„Was ist gutes Deutsch?"で考察の対象となっているのは、ラジオやテレビ、新聞、メールなどのメディア、また広告、政治関係のテクスト、授業の中のドイツ語（母

語として、あるいは外国語として)、専門的なテクスト、法律テクストなど、その分野は多岐にわたっている。これらのテクストを Koch/Oesterreicher (1985) のモデルに依拠して分類すると次の図のようになる。

図 3　ことばのジャンルによる送り手と受け手との遠近関係



「このモデルは、上半分が文字という『メディア』によるもの、下半分が音声という『メディア』によるものである。一方、送り手と受け手との関係が『コンセプト』として『近い』か『遠い』かという観点で、横軸の左端に『近いことば』(Sprache der Nähe) が、右端に『遠いことば』(Sprache der Distanz) が置かれている。つまり、(コンセプトとして) 近いか遠いかは、言い換えると話しことば的か書きことば的かは、相対的な問題であって、連続的な横軸のどこに位置するかによってさまざまな度合いがあることになる。」(高田 2011: 14 より引用)

4.2.2 テクスト種類とその特徴

では、それぞれのテクスト種類によってどのような特徴が見られるのだろうか。„Was ist gutes Deutsch?"の中で論じられている、さまざまなジャンルに見られるドイツ語の特徴 (例:「学術テクストのドイツ語は受動態が多い」、「法律関係のテクストには名詞文体があまり見られない」等)、およびそのジャンルで望ましいとさ

れている特性（例：「広告のドイツ語は心に訴えかけるようなものがよい」、「ニュースのドイツ語は方言的要素がないのがよい」等）を抜き出すと次の図のようになる。（◎）はそのテクストでよく見られる特徴、（○）は望ましいとされる特徴を表し、逆に（△）はあまり見られない特徴、（×）は重要視されない特徴を表す。

図4　テクスト種類とその特徴

（◎）よく見られる特徴、（○）望ましいとされている特徴

（△）あまり見られない特徴、（×）重要視されていない特徴

E-Mail	Werbung	wissenschaftliche Texte	Rechtssprache
◎ Denglisch ○ klar ○ höflich ◎ Sprachökonomie ○ kreativ △ richtig	○ ansprechend ○ kreativ ◎ Neologismus ◎ Anglizismus × grammatisch richtig	◎ lange Sätze, Schachtelsätze Passiv, Genitiv ◎ grammatisch regelhaft	○ prägnant ○ richtig u. verständlich ◎ folgerichtig, kurzer Satzbau △ Nominalstil

Chat, Twitter	Alltagsgespräch	Zeitung	Nachrichten
◎ Ellipse, fragmentarisch ◎ Anglizismus ◎ Onomatopöie × grammatisch, orthographisch richtig	○ höflich ○ verständlich ○ offen, flexibel	○ verständlich ◎ kurze Texte ○ kohärent ○ direkt ○ prägnant, klar ○ elegant	○ grammatisch, phonetisch richtig ○ regiolektfrei, dialektneutral ○ vertraut

本論文では、このうち、文字メディアであるが話しことば性が高いEメールやツイッター、同じく文字メディアで遠いことば性が高い学術論文、法律のドイツ語、および新聞の特徴を取り上げる。

4.3.　近いことばのジャンル：インターネットメディアの中のドイツ語

まずは文字メディアでも近いことば性が高いEメール、ツイッターなどのインターネットメディアのドイツ語を取り上げる。メールやチャットと一口にいっても、メールの種類や対話相手との関係などによって、文体や内容にはかなり幅があるだろう。Diekmannshenke（2007）は「新しいメディアツールが登場するたびに言葉の退廃が嘆かれるが、その原因として英語の影響を多分に受けた、いわゆる

„Denglisch"（疑似英語語法）と正書法の乱れが挙げられる」としている。[20] しかしながらコミュニケーションが円滑に行われている限り、大文字書きをしなくても、あるいは打ち間違いがあったとしても、たいした問題にはならない。むしろ「相手に早く返信をすることの方が大切」とネット上の作法（いわゆる„Netikette"）の重要性を強調している。[21] 親密度の高い相手であれば、文法や正書法といった規範遵守の強制力は低いであろうし、しかも迅速なコミュニケーションに重きを置けば置くほど、厳密な正書法にはかまっていられないであろう（渡辺 2005: 94）。略語、頭字語、絵文字、大文字書きなど、インターネットメディア（ここではツイッター）の言語的特徴については Moraldo (2012) に詳しい。

図 5　インターネットコミュニケーションの位置づけ

	概念 (konzeptionell) 話しことば性 (mündlich)　　書きことば性 (schriftlich)
デジタル伝達 媒体が文字 (graphisch) 非デジタル伝達	チャット　携帯メール　E メール （ツイッター） グリーティングカード　　法律文
デジタル伝達 媒体が音声 (phonisch) 非デジタル伝達	電話 講演

〔白井 2005: 112 参照、（ツイッター）加筆は著者による。〕

20) ただし Diekmannshenke は、「インターネットの中の言語慣用はたしかに言語の変遷を示すものだが、言葉の乱れにつながるものではない」という立場を取っており、逆に「インターネットメディアは言葉との新しい付き合い方を呈示してくれるもの」だとしている。その一例として、「メールであれ、チャットであれ、文字を媒介としたコミュニケーションは、直接相手と話す場合よりも、慎重に言葉を選ぶ時間がある。それによってユーモアも含め、気の利いたことが言えたり、巧みな言葉遣いが駆使でき、お互いにより楽しくコミュニケーションすることができる」ということを挙げている (Diekmannshenke 2007: 213-227)。

21) Diekmannshenke は「インターネット上のコミュニケーションには『グライスの会話の公理』(1. 量の公理、 2. 質の公理、3. 関係の公理、4. 様態の公理）が応用できる」とする Püschel の説を紹介している。言語そのものの記述よりも、ネット上のマナーについてより多く言及されている (Diekmannshenke 2007: 216)。

「インターネットコミュニケーションの位置づけ（白井 2005）」を一部改変したのが図 5 である。ツイッターはチャット同様、話しことばを最もよく反映したメディアであるので、メールよりさらに左に位置づけられる。ツイッターは文字メディアであるものの、概念的には（konzeptionell）話しことば性の高いコミュニケーションで、書き手の創造性を反映する視覚的表現であるといえる。多くの場合、言語経済性の観点から行われる省略体は、話しことばの特性である（Moraldo 2012: 100f.）。特に「コミュニケーション相手との親密さ」（kommunikative Nähe）、「表現力の豊かさ」（Expressivität）、「強い情緒的参与」（emotionale Beteiligung）が表現されている状況で、省略が見られる。ツイッターのドイツ語に特徴的なのは、いわゆる「電報文体」と呼ばれる、4.3.1 に挙げるような断片的な文体である（Moraldo 2012: 100f.）。

4.3.1 省略

ツイッターでは SMS やチャット同様、語末音消失（例：drück）、語頭音消失（ne < eine）、同化（haste < hast du）など、音韻、形態、文法上の特異性が観察されるが（渡辺 2005: 97）、それと並んで多くの省略が行われている。次の 4 つの例では「es+コプラ動詞」の省略(33)、コプラ動詞 sein のみの省略(34)、指示代名詞 das ＋sein の省略(35)(36)が見られる（Moraldo 2012: 100）：

(33) @U2tour *seufz* nur Lieblingslieder... **[Es ist]** schade, dass ich nicht dabei sein kann. (Moraldo 2012: 100)

(34) Da geht man schon <u>ne</u> Viertelstunde eher los und dann is Stau. Klasse **[ist]** das und nicht alles ist schnelllebig. (Moraldo 2012: 101)

(35) **[Das ist] (aber)** schade. Dann <u>drück</u> ich fürs nächste Mal wieder die Daumen;) (Moraldo 2012: 101)

(36) Neue sitzordnung in deutsch gefällt mir nicht so... mh vllt (statt: vielleicht) **[ist das]** eine Strafe für die 5:(. (Moraldo 2012: 101)

さらに電報文体(Moraldo 2012: 101)を想起させる特徴として、冠詞(37)、主語と動詞(38)の省略が挙げられる：

(37) **[Die]** Seite könnte aktuell ein wenig langsamer sein, ist aber bald gefixt. ... **[Die]** Pause ist rum. xD *schnief* wieder weiter an die arbeit. (Moraldo 2012: 100)

(38) Genießt man das Leben nun besser in vollen oder in leeren Zügen? **[Es ist]** Angenehm friedlich im ICE heute morgen...; **[Ich habe]** Fieber. **[Ich habe]** Alle Termine abgesagt. Tut mir leid. (Moraldo 2012: 100)

語末音および語頭音の消失[22] (39)、同化(40)といった音韻面の現象は、話しことばの特性がインターネットを媒介とした書きことばに浸透している事例と言えるだろう（渡辺 2005: 97)。つまり「聞こえたように（話すように）書く」ということが頻繁に行われており（例：r の母音化 oda < oder、aba < aber)、オノマトペ（例：haha, bäh「げぇー、ちぇっ」、aua! 等）(41)も多用される[23]：

(39) hahaha dann **is** (< ist) ja gut, dass ich so weit weg bin – obwohl meine star wars phase schon **ne** (< eine) weile her **is** (< ist) *pfeif*::) (Moraldo 2012: 104)

(40) Mhhh das ist ja richtig Kacke. **Haste** (< Hast du) mal nen Espresso mit Zitrone ausprobiert? (Moraldo 2012: 103)

22) 語末音 e の消失に関してはすでに 17 世紀に、明確な誤りであるという認識があった。「所有代名詞の場合の語末音消失（例えば deing Sache, unserg Augen に代わる dein Sache, unser Augen）について、例えばクラーユス（1578 年）はこの語末音消失形を善し悪しの価値判断なしに記述しているのに対して、1641 年以降の文法家たちは 1 音節の語尾が付かない dein (Sache)のような語形を『誤り』として拒否している。」（髙田 2005: 55）

23) 「ハノーファー大学の P.シュロビンスキー教授は、『携帯電話という新しいメディアの技術的制約によって、なかんずく、ショートメールというコミュニケーション形式において、従来の書き言葉とも話し言葉ともつかない „新たな口語性(Neue Mündlichkeit)" が誕生し、それがとりわけ若者のコミュニケーション様式に浸透していっている』、と考えている。」（渡辺 2005: 93）

(41) Tee über Beine gekippt = **aua**! very heiss und aaaahaaaaaa. Q_Q; aaaaah mir tut alles weh und wieso schreib ich des hiia lwww:/ :D (Moraldo 2012: 107)

4.3.2 語彙の簡略表記

ツイッターではチャット同様、語彙の簡略表記が頻繁に見られる。頭字語（Akronym）と呼ばれる、いくつかの単語の頭文字だけを並べた語が典型的な例である（Moraldo 2012: 102）：

(42) **lol** [laughing out loud] (lauthals lachen)

(43) **rofl** [rolling on (the) floor laughing] (ich rolle mich lachend auf dem Boden)

(44) **omg** [Oh My God] (oh, mein Gott!)

(45) Öhhhh **lol** die Tür geht nich auf und keiner is da O.o.; **rofl** wie plötzlich allen auffällt, dass es halb vier ist xD und spät xD; **lool** die juristen fühlen sich ans bein gepinkelt weil heute in der Mensa am Park Veggie-Tag ist. **omg** werdet erwachsen leute XDDD.

以上は英語由来の例であるが、ドイツ語の頭字語としては次のようなものが挙げられる（Schlobinski 2009）：

(46) HDL: hab dich lieb (47) dubidodo: du bist doch doof (48) waudi: warte auf dich

4.3.3 図像表現および視覚的文字表現

4.3.3.1 顔文字、絵文字

:p / o_o / :D といった顔文字は「喜び」、「悲しみ」、「怒り」といった気分、心情や、その他感情を視覚的に表現する：

(49) Vor allem stößt Twitter an seine Grenzen wenn es präzise sein soll. Das geht

nicht mit 140 Zeichen. :((＝⊗) (Moraldo 2012: 105)

4.3.3.2　動詞語幹辞

*freu*のように、動詞を語幹だけにしてアステリスク*で囲む[24]ことで感情を表す表記法がある(Moraldo 2012: 106)。これは「動詞語幹辞(Inflektiv)」と呼ばれる。渡辺（2005: 104）によれば、この「動詞語幹辞」と日本語の(笑)、(爆)などの「かっこ文字」とは類似点がきわめて多く、どちらも動詞語幹(およびその一部分)からなるだけでなく、それが文末(発話の末尾)に決まって現れる点でも、また「メール作成者の心的態度や様態、言語外行動についてのコメント機能をもつ点でも双方に共通点[25]がある。」（渡辺 2005: 104）：

(50) Also das ist ja wohl selbstverständlich, dass man nix gegen den Vfb sagt! ***entrüst***;-)

4.3.3.3　英数字の組み合わせ

単語の綴りを一部数字で代用したもので、他にも **CU**< See you / **gn8**< Gute Nacht 等がある：

(51) und du bist mein best twitter-friend **4ever** (< forever):* (Moraldo 2012: 108)

4.3.3.4　文字種

大文字書き(52)、あるいは文字の繰り返し(53)によって、感情の強さ、発言の重要さを強調する：

(52) Wenn es was gibt, das ich hasse, dann sind es Männer die nur jammern, obwohl sie na der Situation selbst schuld sind... **WIDERLICH**!!! (Moraldo 2012: 106)

24) アステリスクは「(登場人物の考えを書き込む) 吹き出しのような働き」をしている（Haase et al. 1997: 78: Moraldo 2012: 106)。例：*entrüst*< entrüsten「ひどく怒らせる、憤慨させる」(怒)

25) また、動詞の語幹だけで意味を強める用法もドイツ語、日本語共通に見られる。「活用語尾をつけないで語幹のままで文を終止し、感動の気持ちを表す。例：『あっ痛。』『おお寒。』『おお辛(つら)。』」（田中 1990: 133）

(53) und weil ich sie **gaaaanz dooooooll lieeeb** hab:*=D (Moraldo 2012: 106)

4.4. 遠いことばのジャンル：学術論文、法律、新聞

Eroms[26] は「よいドイツ語」の条件として「目的に合った言葉遣いを選択する」ことを挙げている。学術論文、法律用語、新聞ではどのような言葉遣いがふさわしいとされるのだろうか。ここでは遠いことば性の高い文字メディア、つまり学術論文、法律用語、新聞の例を見ていく。

4.4.1 学術論文（学問的なテクスト）

学術論文の言語的特徴として、文の長さ、受動態[27]、名詞句の長さ、機能動詞構造[28]、機能動詞[29] などが挙げられる。(54)はドイツの農業について書かれた学術テクストである。

学術テクスト	修正されたテクスト
(54) Der Strukturwandel in der Agrarwirtschaft Deutschlands hat zur Ausräumung naturnaher Elemente der Agrarlandschaft durch Flurbereinigung und Drainage von Feuchtgebieten, zur Zunahme großflächiger Monokulturen aufgrund von Spezialisierung und Betriebsvergrößerung und zur Aufgabe traditioneller Fruchtfolgesysteme geführt.	(55) Mit dem Strukturwandel in der Agrarwirtschaft Deutschlands sind naturnahe Elemente der Agrarlandschaft durch Flurbereinigung und Drainage von Feuchtgebieten ausgeräumt worden und großflächige Monokulturen aufgrund von Spezialisierung und Betriebsvergrößerung haben zugenommen. Dadurch sind traditionelle Fruchtfolgesysteme aufgegeben worden.

26) Eroms 2007: 98. 以下、学術論文についての記述は主にこの Eroms 論文による。

27) 実用的なテクストにおいて受動態が用いられているのは平均10.5%であるのに対して、官庁関係のテクストにおける受動態の使用率は26%にのぼる（Eroms 2007: 100）。

28) 動詞から派生した動作名詞（Nomen actionis）と機能動詞（Funktionsverb）とが結びついたもの。動作名詞は前置詞句の一部として現れることが多い。例：in Anspruch nehmen（要求する）、zum Ausdruck bringen（ことばに表現する）など（川島 1994：278）。

29) Eroms は「意味が弱化した動詞」と言っているが、「本動詞としての語彙的意味（lexikalische Bedeutung）をほとんど失い、文の定動詞となりうるといった文法的機能しか果たさない」（川島 1994: 278）ことから、ここでは「機能動詞」という用語を用いる。

学術テクスト	修正されたテクスト
Charakteristisch ist die Verwendung schwerer Landmaschienen, hoher Chemiedünger- und Pestizideinsatz sowie bodenunabhängige Massentierhaltung mit nur schwer entsorgbarer Gülleproduktion. (Glaser/Gebhardt/Schenk 2007: 166; Eroms 2007: 98f.)	Charakteristisch ist die Verwendung schwerer Landmaschinen, hoher Chemiedünger- und Pestizideinsatz sowie bodenunabhängige Massentierhaltung mit ihrer Gülleproduktion, die nur schwer entsorgt werden kann. (Eroms 2007: 99)

(54)のような学術論文の一部だけを見ても、入り組んだ構造をもつ名詞句が多く用いられていることがわかるだろう。このような名詞句は動詞の名詞化(例：Ausräumung, Flurbereinigung, Zunahme, Betriebsvergrößerung, Verwendung, Pestizideinsatz, Massentierhaltung)によるものである。一方テクストに出てくる動詞は hat geführt、ist のようなそれ自体に意味のない動詞のみである。ここに見られる動詞由来の名詞(Verbalsubstantiv)が主体のドイツ語は、「紙の上のドイツ語(Papierdeutsch)」という名称で、役所などが用いる堅苦しいドイツ語として揶揄されることがある。

では専門用語を減らし、機能動詞を用いないで、短くわかりやすい文章にするとどうなるだろうか。それが右側(55)の文である。確かに（特に素人には）理解しやすい文章になったかもしれないが、同時に学術論文としては「よくないドイツ語(ungutes Deutsch)」となってしまった。どのような専門テクストにもほぼ共通する、このような矛盾はどういった理由によるものなのだろうか。それは専門的なテクスト固有の型[30]（専門用語[31]、テクストに独特の表現方法）に従っていないからである。

30) 公的なテクストでは、言語手段の用い方や言い表し方がかなり規範化されている。文体的な規範化の程度はテクスト種類次第であるが、「公的」な性格が基本になっているので、「どんなに個人が言葉を選択する余地が残されていると言っても、私的な要素は排除されるのが常である。[中略] 法律や条例や指示・指令などでは、ich や du、wir や ihr、それに Sie が使われることはない。ここでは主語は常に法人格の主語 juristisches Subjekt である。」(乙政 2000: 136)

31) 「医学は独自の語彙を持つ特殊な学問の領域である。[中略] 患者が医師から非常にくわしい説明を受けることは多い。しかしその説明は、決定的な専門用語を避けざるをえないことが多いために不正確であり、また不完全にならざるをえないのである。そのような説明の際に専門用語がどれほどことばを節約し、どれほどことばの負担を軽くするものであるかが明らかとなる。」(バウジンガー1982: 121f.)

4.4.2 法律のドイツ語

テクストの専門性と理解しやすさ（Verständlichkeit）との共存が難しいことは、法律のドイツ語にもあてはまる。「法案は正しい言葉で、またできるだけ万人にわかりやすく書かれていなければならない。」（Thieme 2007: 322）とされているが、法律の文言というのはわれわれ素人にとって、到底理解しやすいものとは言えない。ここでの「わかりやすさ」とは何を意味するのだろうか。

法律テクストは理解しやすいと同時に、誤解の余地のないものでなければならない。つまり他に解釈の余地ができないような一義的なものでなければならないのである。しかし法律文に求められる「わかりやすさ」と「誤解の余地のないこと」、この二つは矛盾し合う要素である。[32] そもそもわかりやすい法律とは、一体どのようなものなのだろうか。

例えば 1. 短い構文、2. 明晰な表現、3. 筋の通った構成、4. 名詞的文体および名詞の羅列を避ける、5. 2 格[33] の多用を避ける、このような文体を用いれば言語的により理解しやすい法律文にはなるだろう。しかし法的な理解という観点から見ると、果たしてわかりやすい法律だといえるのだろうか。

(56) Der Schuldner ist verpflichtet, die Leistung so zu bewirken, wie Treu und Glauben mit Rücksicht auf die Verkehrssitte es erfordern. (Thieme 2007: 324)

この一般条項では、（法律家にとってでさえ一読してわからないような）多くの事項が抽象的な表現で取り決められており、多くの専門知識や現場での経験を通じてようやく理解される。つまり、文の構造を単純にすればわかりやすくなるという性質のものではない。言語でのレベルでのわかりやすさと、法律で求められるわかりやすさは次元が違うのである。とはいえ、多くの人にとって理解しや

32) 「公用語の複雑さは部分的には、物事をできるだけ誤解のないように、そして正確に述べようとするところから逆説的に生じたのである。[中略]法令の条文の複雑さもまた、部分的には日常語と対照的にあいまいではなく表わそうとした結果である。」（バウジンガー1982: 124）

33) 「Fischer（1992）などの調査によると、属格は volkstümlich なテキスト（Gebetsliteratur, Predigten, Briefe, Lieder）などでは減少し、逆に Rechtstexte, religiöse Schriften, Chroniken など公的な意味合いを持つテキストにおいて多く用いられたため、属格はもっぱら gewählte Sprache, gehobene Stilschicht, archaische Wortwahl の指標となった。法律関係のテキストで属格が比較的多く用いられるのはそのためである。」（荻野 2012）

すい法律を求める声は一般市民や政治界からのみならず、法律を作る立場である法律家からも出ており、法学者と言語学者が協力して「わかりやすい法律」に向けて努力しているという(Thieme 2007: 322-330)。[34]

4.4.3 新聞のドイツ語

次に新聞で用いられるドイツ語がどのようなものか概観してみたい。新聞記事のドイツ語は、概して明確、きわめて論理的で、社説と異なり普通の記事は「情報を伝える」という目的ゆえにできるだけ自分の意見を差し挟まないように書かれている。とはいえ、新聞と一口にいっても特にインテリ層に好んで読まれる„Frankfurter Allgemeine Zeitung (FAZ)"[35]、„Süddeutsche Zeitung"[36] や„Die Welt"、„Frankfurter Rundschau"[37] などのクオリティ・ペーパー（高級紙）と、一方大衆紙 „Bild"[38]とでは、その特徴を一律に語ることができないのは明らかであろう。

---

34) 「正確でわかりやすい法律をつくるための措置」として、2009年7月2日ドイツ連邦議会の議事規則が改正され、「法案の言語的正確性とわかりやすさの審査」について規定した第80a条が新設された。「ドイツ連邦議会では、言語的に不正確で、そのために法律となった場合に適用に支障をきたすと指摘される法案や、国民生活に密接な関連を有するにもかかわらず、一般人にとってわかりにくい法案がしばしば提出されることがかねてから問題とされ、そのための対策が講じられてきた。すでに1966年、連邦議会本会議で『国土整備法案』が審議された際、法案中の『連邦領域は、その構造において発展へと導かれなければならない。』との文言が、議場の困惑と爆笑を誘ったことをきっかけとして、当時のゲルステンマイヤー議長の手によって、連邦議会内に『連邦議会に置かれるドイツ語協会編集部』が設置され、今日に至るまで同部の専門スタッフが、法案の言語面のチェックを行ったり、相談に応じて助言を提供したりするなどの活動を行ってきた。しかし配置された言語学専門家は1、2名のみで、その存在を知らない議員も多かったことから、言語的正確性及びわかりやすさに欠けると判断された法案の言語的チェックを行うとするシステムが確立された。」（山口和人「ドイツ－正確でわかりやすい法律を作るための措置」http://www.ndl.go.jp/jp/data/publication/legis/pdf/02430106.pdf 参照）

35) 「ドイツで最も高名を得ている新聞です。格調高い正統派、政治的姿勢は保守で左派政治勢力に対して厳しい論調が多い感じだが、それはむしろドイツの国家風土の基盤に根ざさず、長期的な見通しに欠けるポピュラリズム（大衆に取り入る人気取り政策）を排除しようとする立場からであるとうかがわれます。」（伊藤 2001: 30）

36) 「『南ドイツ新聞』の名称の通り、南部のバイエルン州を基盤とする新聞ですが、全国的に読まれている点は上記 FAZ と同じ。［中略］政治的立場はリベラルな保守主義と言えるでしょう。」（同上: 30f.）

37) 「社民党に近い政治的立場をとり、FAZ の保守姿勢と対比されることが多い。同紙自体は『独立自主』を標榜している。ニュースの背景を発掘した記事を得意とする。」（同上: 31）

38) 「日本のスポーツ新聞と同じようなつくりで、センセーショナルな記事と豊富な写真が特徴。」（鷲巣 2006: 109）「『低俗新聞』とインテリは眉をしかめるが、大衆感情への影響力が大きいので政治家にとっては気になる新聞。そのせいか著名政治家のインタビュ

例えば Frankfurter Allgemeine Zeitung 紙では使われている単語が難しいだけでなく、文の構造も複雑で、関係代名詞、また副文の中に副文がある「箱入り文」も多く使われている。一方、紙面の半分以上が写真を占める Bild 紙の方は、言語を簡略化し、躍動するようなリズム感を文に与え、そこから緊張感を生み出そうとして、それが文法規範から逸脱しようとも、自由自在な使い方を試みる（シュトラスナー2002: 132）。

新聞の読者にとってよいドイツ語とはどのようなものなのだろうか。報道規範によれば、「新聞に携わる記者や新聞社には世間に対する責任があり、報道の威信を守る義務[39]がある。」（Pressekodex 2006: Pollmann 2007: 200）とされ、ジャーナリストと読者の、メディアを通したコミュニケーションを成功させるためには「読者目線に立ったもの（nutzerfreundlich）」でなければならないとしている。[40]（「読者の関心を引き出すような、同時に読者を納得させるような表現を選び、補助的に視覚的な情報を用いる。」「誰にでもわかるような、受け入れられやすいような語彙や統語論的な表現形式、定型化された報道テクスト„standardisierte Pressetextmuster“を用いる」など。）

Pollmann（2007）は、Frankfurter Allgemeine Zeitung 紙（以下 FAZ）、Süddeutsche Zeitung 紙（以下 SZ）、Bild 紙が報じた記事（2006 年 9 月、ドイツのベルリン・ドイツ・オペラがその年の 11 月に予定していたモーツァルトの歌劇「イドメネオ（Idomeneo）」の公演を中止する、と発表。イスラム教の預言者ムハンマドらの切られた首が出てくる場面があり、ベルリンの警察当局から「イスラム過激派によるテロの危険がある」という警告を受けた上での自主規制だった。[41]）を比較し、

一記事が結構多い。」（伊藤 2001: 32）それ故、これらの言語資料は日用語・通用語・俗語を探究するための好適な典拠ともなる。

39) そのために広告などによくある「ことば遊び」が新聞（全国紙などいわゆる堅い新聞）にはあまり見られないのだろう。読者が求めているのは面白さや目新しさなのではなく、記事の信憑性なのである。一方、大衆紙、スポーツ新聞にはよく「だじゃれ」が見られる。「新聞等に見られる言葉遊び」については南（2009: 86ff.）参照。

40) Pollmann はさらに「グライスの公理」が新聞にも応用できると述べている。さらに Bucher（2003: 23）が、この 4 つの公理に加えて 2 つの原則（「情報はアクチュアル（aktuell）で多様なものでなければならない。」）を提唱していると述べている（Pollmann 2007: 201）。

41) 「公演中止の決定は、ドイツのヴォルフガング・ショイブレ内相、アンゲラ・メルケル首相を筆頭に、ドイツの政治家たちから厳しく批判され、ドイツ国内のトルコ人社会からも『ムスリムたちが不寛容であると人々の目に映っている。』と反感を買った。」（http://www.el.tufs.ac.jp/prmeis/html/pc/News2006929_3600.html 参照）

それぞれのジャーナリズム文体 „journalistischer Stil" や独特のレイアウトについて考察している。まずは見出しの例、次にそれぞれの記事を引用する：

(57) SZ: „Selbstzensur an der Deutschen Oper" (Pollmann 2007: 202f.)[42]

(58) FAZ: „Klammheimlicher Kniefall"[43] „Die Gefahr steigt - auch die der Blamage"

(59) Bild: „Warum kuschen wir vor dem Islam?"[44] (Pollmann 2007: 210)

SZ:

(60) „Wenn Gefährdungsanalysen der Polizei oder Nachrichtendienste zur Terrorgefahr zu dem Schluss kommen, eine Großstadt wie Berlin sei ‚ein Teil des globalen Gefahrenraums', Deutschland liege im ‚Zielgebiet' islamistischer Fanatiker, aber es gebe keine Hinweise auf ‚konkrete Anschläge', dann ist die Lage nicht beunruhigend. Dann ist sie eigentlich entspannt. Übersetzt heißt das Geraune: Sicherheitsbehörden wissen nichts, schließen aber auch nichts aus." (Pollmann 2007: 206)

FAZ:

(61) „Nun mag man Harms durchaus zugute halten, sie sei ein Opfer fahrlässiger Panikmache des Innensenators geworden, habe anschließend in ehrlicher Furcht um die Sicherheit ihrer Mitarbeiter gehandelt, wie das inzwischen einige Sympathisanten tun [...]. So wie sich die Vorgeschichte der ‚Idomeneo-Absetzung' inzwischen entfaltet hat', stehe Kirsten Harms ‚längst nicht mehr allein'." (Pollmann 2007: 209)

SZ や FAZ の文体は明瞭で簡潔、かつ明確でありながら、同時に洗練された表現や読者の関心を引くような写真が用いられている。また感情的な表現を避け、

42) Pollmann (2007: 203) に 2006 年 9 月 27 日付の紙面 (SZ digital) が掲載されている。
43) http://www.faz.net/aktuell/feuilleton/debatten/deutsche-oper-klammheimlicher-kniefall-1354531.html
44) http://www.bild.de/news/aktuell/news/deutschland-islam-diskussion-870044.bild.html

文章が練られていることで重要な 2 つの基準、つまり信憑性(Glaubwürdigkeit)とわかりやすさが保証されているといえる。

Bild:

(62) „Die Berliner Mozart-Oper – abgesetzt vor Wut und Gewalt empörter Moslems! Jetzt diskutiert ganz Deutschland: Warum kuschen **wir** eigentlich vor dem Islam? Sind **wir** schon so weit, dass wir unseren Alltag aus Sorge vor Moslem-Extremisten umkrempeln? Die große Debatte, was Politiker sagen – Seite 2." (Pollmann 2007: 210)

(63) „Die Deutsche Oper Berlin hat die weltberühmte Mozart-Oper ‚Idomeneo' abgesetzt – aus Furcht vor gewalttätigen Moslems! Grund: Die Inszenierung zeigt die abgeschlagenen Köpfe von Jesus, Buddha – und Mohammed." (Pollmann 2007: 210)

一方 Bild 紙の文章は話しことば性が高く、感嘆符(!)や疑問符(?)によって怒りなどの感情がよく表現されている。何度も執拗に繰り返される修辞疑問によって、または憤怒や拒絶の情を読者が抱くよう、一点に的を絞り込んだ「核心をつく問い」によって、強い説得力を得ている（シュトラスナー2002: 130)。センセーショナルな印象を醸し出し、感情に訴えかけて購買欲をそそる「戦略的文体」とも言えるかもしれない。また „Grund:" のように、省略のためにコロン(:)が使われているのも特徴的である。また記者だけでなく読者も含んだ wir という人称代名詞を用いて連帯感を表し、読者に直接話しかけ、呼びかける。確かに読者層にはアクチュアルなテーマで理解しやすく、話の種を提供してくれるものではある。しかしながら、重要性、信憑性、情報量という基準は、大衆紙にはあてはまらない。Bild 紙のような大衆紙を評価するには、別の基準が必要となるだろう(Pollmann 2007: 210f.)。

5.　おわりに

以上、体系言語学的規範という基準に基づいて「正しい」ドイツ語について考察した後、メールやツイッターなどの近いことば性が高い分野、逆に遠いことば性をもつ学術論文や法律、新聞の中のドイツ語の特徴、それぞれの分野で「よいドイツ語」だと判断するにはどのような基準が考えられるのか概観してみた。それによって、話しことば、書きことばという区別だけでなく、テクスト種類によって、それぞれの分野の言語的特徴や「よいドイツ語」に対する価値判断の基準がいかに違っているか、ということが明らかになった。言語表現が使用される社会的、状況的枠組みにおいて、話し手がその役割を変化させながらその表現や文体を使い分けることは日常的に見られる。言語の使用領域（Register）によって、その基準はさまざまに変化するし、またコミュニケーションの相手が年上や、地位がより高い人の場合にはより丁寧に話そう（書こう）とするだろう。体系言語学的規範に則ったドイツ語が「正しいドイツ語」だとすれば、社会語用論的基準における「よいドイツ語」は、その場の状況に「適切なドイツ語」だと言えるだろう。

つまり、ことばの良し悪しは「正しさ」という絶対的な基準のみで測れるものではなく、「規範の逸脱＝間違ったドイツ語」と一概には言えない。例えば HABEN を HAM と発音することは音韻論的規範からの逸脱、nichts を nix と書くことは正書法的規範からの逸脱であるが、それぞれが適切かどうかという問題は、ジャンルやコミュニケーションの相手などによって異なるのである。

いつの時代にも「若者のことばは乱れている」と思われがちであるが、例えば現代ドイツ語の傾向として挙げられる「2 格の減少」はすでに 14 世紀に始まっていた現象であり（荻野 2012: 本文脚注 14 参照）、ツイッターに特徴的な「語末音消失」は、早くも 17 世紀の文法学者によって誤用だとされていた（高田 2005: 本文脚注 22 参照）。「weil＋定形第二位語順」も現代の傾向ではなく、19 世紀にその用法が確認されている（Elspaß 2005: 本文脚注 8 参照）。「伝統文法から逸脱した用法＝若者ことば＝ことばの荒廃」と結びつけて考えるのは早計であろう。

また文法規範は学校で習う規範であり、言語慣用は学校外で使うドイツ語と思われがちであるが、両者は明確に二分できる性質のものではなく、ましてや対立するものではない。世間で「ことばの乱れ」と言われている現象を学校ではどの

ように教えているのか、逆に言語慣用の場において文法規範はどのような役割を果たしているのか、「言語の変遷」を中心に両者の関係について考察を深めることを今後の課題としたい。

参考文献

Betz, Ruth (2006): *Gesprochensprachliche Elemente in deutschen Zeitungen*. Radolfzell: Verlag für Gesprächsforschung.

Bild: „So knicken wir schon vor dem Islam ein" [Zugriff: 31.10.2012] http://www.bild.de/news/aktuell/news/deutschland-islam-diskussion-870044.bild.html

Burkhardt, Armin (Hrsg.)(2007) : *Was ist gutes Deutsch? Studien und Meinungen zum gepflegten Sprachgebrauch*. Mannheim: Dudenverlag.

Burkhardt, Armin (2007) : Sprachkritik und „gutes Deutsch". In: Burkhardt (2007), 9-16.

Denkler et al. (Hrsg.) (2008): *Frischwärts und unkaputtbar. Sprachverfall oder Sprachwandel im Deutschen*. Münster: Aschendorff.

Diekmannshenke, Hajo (2007): *lol*. Gutes Deutsch in Neuen Medien? In: Burkhardt (2007), 213-227.

Duden (2007) : *Richtiges und gutes Deutsch. Wörterbuch dersprachlichen Zweifelsfälle*. Bearb. v. Peter Eisenberg unter Mitwirkung von Franziska Münzberg u. Kathrin Runkel-Razum., 6. vollst. Überarb. Aufl. Mannheim u.a.: Dudenverlag.

Duden (2009): *Die Grammatik. Unentbehrlich für richtiges Deutsch*, 8. überarb. Aufl. Mannheim u.a: Dudenverlag.

Elspaß, Stephan (2005): *Sprachgeschichte von unten. Untersuchungen zum geschriebenen Alltagsdeutsch im 19. Jahrhundert*. Tübingen: Niemeyer.

Eroms, Hans-Werner (2007): Grammatisch gutes Deutsch – mehr als nur richtiges Deutsch. In: Burkhardt (2007), 90-108.

Fischer, Annette (1992): Varianten im Objektbereich genitivfähiger Verben in der deutschen Literatursprache (1570-1730). In: Schildt, Joachim (Hrsg.): *Aspekte des Sprachwandels in der deutschen Literatursprache 1530-1730*, 273-324. Berlin: Akademie.

Frankfurter Allgemeine Zeitung: „Deutsche Oper-Klammheimlicher Kniefall" [Zugriff: 31.10.2012] http://www.faz.net/aktuell/feuilleton/debatten/deutsche-oper-klammheimlicher-kniefall-1354531.html

Haas, Wolf (2001): *Auferstehung der Toten*. Hamburg: Rowohlt.

Heringer, Hans Jürgen (1989): *Grammatik und Stil. Praktische Grammatik des Deutschen*. Hirschgraben: Cornelsen.

Hoffmann, Ludger (2008): Wozu wir Grammatik brauchen. In: Denkler (2008), 221-246.

Janich, Nina (2007): Da werden Sie geholfen? Zur Frage eines „guten" Deutsch in der Werbung. In: Burkhardt (2007), 228-240.

Janich, Nina (2010): *Werbesprache. Ein Arbeitsbuch*. 2. Auflage. Tübingen: Narr.

Koch, Peter / Wulf Oesterreicher (1985): Sprache der Nähe — Sprache der Distanz. Mündlichkeit und Schriftlichkeit im Spannungsfeld von Sprachtheorie und Sprachgeschichte. In: *Romanistisches Jahrbuch*. 36, 15-43.

Krischke, Wolfgang (2012): Besser als wie man denkt. »Schlechtes Deutsch« als Werbebotschaft. In: *Muttersprache*.122(2), 102-130.

Liedtke, Frank (2007): Was ist ein gutes Alltagsgespräch? In: Burkhardt (2007), 171-185.

Lochtman, Katja (2012): Sprachnormen in der Auslandsgermanistik. In: *Muttersprache*. 122(3), 194-203.

Moraldo, Sandro M. (2007): Steht die deutsche Sprache vor dem Ausverkauf? – Einige Bemerkungen zum gepflegten Sprachgebrauch aus der Sicht der Auslandsgermanistik. In: Burkhardt (2007),393-404.

Moraldo, Sandro M. (2012): 《das Leben in 140 Zeichen ...heißt Twitter:-)》 Teil Ⅱ: Sprachliche Aspekte der Microblogging-Plattform Twitter. In: *Sprachspiegel*, Heft 4. (2012), 98-109.

Nindl, Sigrid (2010): *Wolf Haas und sein kriminalliterarisches Sprachexperiment*. Berlin: Schmidt.

Pollmann, Kornelia (2007): Gutes Deutsch für Zeitungsleser? Ein Medienereignis im Spiegel der Presssprache. In: Burkhardt (2007), 199-212.

Reiners, Ludwig (2004): *Stilkunst. Ein Lehrbuch deutscher Prosa*. 2. Auflage. München: Beck.

Schiewe, Jürgen (2007): Angemessenheit, Prägnanz, Variation. Anmerkungen zum guten Deutsch aus sprachkritischer Sicht. In: Burkhardt (2007), 369-380.

Schlobinski, Peter (2009): *Duden VON HDL BIS DUBIDODO. (K)ein Wörterbuch zur SMS*. Mannheim: Bibliographisches Institut.

Schreiber, Matthias (2006): Deutsch for sale. In: *Der Spiegel*. 40, 182-198.

Shirai, Hiromi (2009): *Eine kontrastive Untersuchung zur deutschen und japanischen Chat-Kommunikation*. Frankfurt am Main u.a.: Lang.

Sick, Bastian (2011): *Der Dativ ist dem Genitiv sein Tod. Ein Wegweiser durch den Irrgarten der deutschen Sprache*. Folge 1-3 in einem Band. 11. Aufl. Köln: Kiepenheuer&Witsch.

Sobotta, Kirsten (2007): Gutes Deutsch im Bereich der Wortbildung? In: Burkhardt (2007), 78-89.

Takada, Hiroyuki (2007): „Er spricht gut, so wohl richtig, als rein". Was war gutes Deutsch im Barock und in der Aufklärung? In: Burkhardt (2007), 17-31.

Theime, Stephanie (2007): Was ist gutes Deutsch in der Rechts- und Verwaltungssprache? Eine Gratwanderung zwischen Fachsprache und Verständlichkeit. In: Burkhardt (2007), 322-330.

Topalović, Elvira / Elspaß, Stephan (2008): Die deutsche Sprache – ein Irrgarten? Ein linguistischer Wegweiser durch die Zwiebelfisch-Kolumnen. In: Denkler et al. (2008), 37-57.

Watanabe, Manabu (2000): Über den Normbegriff in der Linguistik. In: Susanne Beckmann, Peter-Paul König und Georg Wolf (Hrsg.): *Sprachspiel und Bedeutung. Festschrift für Franz Hundsnurscher zum 65. Geburtstag*.Tübingen: Niemeyer, 335-341.

Wermke, Matthias (2007): Und wie würden Sie entscheiden? Richtiges und gutes Deutsch in der Sprachberatung. In: Burkhart (2007), 360-368.

Wustmann, Gustav (1891): *Allerlei Sprachdummheiten. Kleine deutsche Grammatik des Zweifelhaften, Falschen und Häßlichen. Ein Hilfsbuch für alle die sich öffentlich der deutschen Sprache bedienen*. Leipzig: Grunow.

Zimmer, Dieter E. (2007): Gutes Deutsch. In: Burkhart (2007), 381-392.

東照二（2011）『社会言語学入門』研究社。

イーグルトン、T.（大橋洋一訳）（1997）『新版文学とは何か』岩波書店。

伊藤光彦（2001）『ドイツ語情報世界を読む－新聞からインターネットまで』白水社。

荻野蔵平（2012）「現代ドイツ語の属格（Genitiv）について」日本独文学会西日本支部学会（2012 年 12 月 1 日、福岡大学）シンポジウム「現代ドイツ語の特徴と傾向」ハンドアウト。

乙政潤（2000）『表現・文体』大学書林。

川島淳夫他編集（1994）『ドイツ言語学辞典』紀伊國屋書店。

佐藤牧夫他（1985）『ハルトマン・フォン・アウエ 哀れなハインリヒ』大学書林。

シュトラスナー、エーリヒ（大友展也訳）（2002）『ドイツ新聞学事始－新聞ジャーナリズムの歴史と課題』三元社。

白井宏美（2005）「チャット・コミュニケーションの日独比較－コンピューターメディアによる『会話』の交わし方－」、杉谷他（2005）、111-130 頁。

杉谷眞佐子・髙田博行・浜崎桂子・森貴史編（2005）『ドイツ語が織りなす社会と文化』関西大学出版部。

須澤通・井出万秀（2009）『ドイツ語史－社会・文化・メディアを背景として』郁文堂。

髙田博行（2005）「ドイツ語の近代化への歩み－造語力に裏打ちされた文化言語の『発見』－」、杉谷他（2005）、49-67 頁。

髙田博行（2009）「歴史社会言語学の拓く地平」『月刊言語』2009 年 2 月号、34-41 頁。

髙田博行・椎名美智・小野寺典子（編著）（2011）『歴史語用論入門－過去のコミュニケーションを復元する』大修館書店。

田中稔子（1990）『田中稔子の日本語の文法－教師の疑問に答えます－』近代文藝社。

バウジンガー、ヘルマン（1982）『ことばと社会－さまざまなドイツ語』三修社。

南雅彦（2009）『言語と文化』くろしお出版。

山口和人「ドイツ－正確でわかりやすい法律を作るための措置」（閲覧日時：2012 年 10 月 31 日）

http://www.ndl.go.jp/jp/data/publication/legis/pdf/02430106.pdf

鷲巣由美子（2006）『改訂版ドイツ語を読む』三修社。

渡辺学（2005）「携帯メールの日独語比較対照－文字と視覚的記号によるコミュニケーションのあり方－」杉谷他（2005）、91-110 頁。

（さとう・めぐみ　学習院大学大学院人文科学研究科博士前期課程）

Was ist „gutes Deutsch"?

Zwischen grammatischen Normen und Sprachgebrauch

MEGUMI SATO

Was ist eigentlich „gutes Deutsch"? In Band 8 der Dudenreihe „Thema Deutsch" wird diese Frage in 30 Aufsätzen aus verschiedenen Perspektiven beleuchtet (Burkhardt 2007). Es wird festgestellt, dass es wirklich sehr viele Kriterien dafür gibt. In der Tat wird der Begriff „gut" auf vielfältige Weise definiert: rein, verständlich, deutlich, angemessen, schön, elegant, höflich, prägnant, kreativ und grammatisch sowie orthographisch richtig.

Die Frage, was als „gutes Deutsch" zu gelten hat, kann also nicht generell beantwortet werden, sondern ist immer von der Zeit und auch von den jeweiligen Textsorten abhängig. Es gibt Texte mit sprechsprachlichen Zügen, wie z.B. E-Mails oder Tweets auf Twitter, andererseits auch Texte in konzeptionell schriftlicher Sprache: Gesetzestexte, Zeitungen und wissenschaftliche Abhandlungen usw. Außerdem verwendet eine Person je nach Situation verschiedene Register. Je nach den Umständen (z.B. Ort, Zeit, Beziehung zum Kommunikationspartner) wählt man nämlich seine Ausdrucksweise: Mal redet man formell, mal informell. Ein wichtiges Kennzeichen von gutem Deutsch ist also die Wahl eines angemessenen Sprachregisters, das sich an bestimmten soziopragmatischen Normen orientieren muss. Eine weitere Voraussetzung ist formale sprachliche Richtigkeit, die systemlinguistischen Sprachstandards hinsichtlich Grammatik, Orthografie und Phonetik genügen muss.

Ist grammatisch gutes Deutsch, d.h. richtiges Deutsch im Sinne von herkömmlicher Regeleinhaltung, immer „gutes Deutsch" und stellt dagegen eine regelwidrige, aber gleichzeitig dem gegenwärtigen Trend angepasste Ausdrucksweise „schlechtes Deutsch" dar? In diesem Aufsatz werden die Sichtweisen verschiedener Autoren zu diesem Thema referiert, um die Beziehung zwischen den beiden Kriterien deutlich zu machen.

Zuerst werden einige sprachliche Phänomene analysiert, die als Verstöße gegen grammatische Normen und auch als Indiz für einen Sprachverfall bezeichnet werden. Dazu gehören z.B. weil mit Hauptsatzstellung, der Rückgang des Genitivs und Tilgungen wie „ich hab" statt „ich habe".

Im nächsten Kapitel wird „gutes Deutsch" in verschiedenen Textsorten behandelt. In der Werbesprache oder auf Twitter beobachtet man oft absichtliche Verstöße gegen die Orthographie oder die grammatischen Normen. In der Werbung handelt es sich um die kalkulierte Verletzung sprachlicher Normen, um die Aufmerksamkeit des Lesers zu gewinnen und einen bleibenden Eindruck zu hinterlassen. Auf Twitter fällt die sprechsprachliche Gebrauchspräferenz für umgangssprachliche Formulierungen auf, die viele jugendsprachliche Elemente wie Tilgungen oder Anglizismen enthalten. Ältere Generationen tendieren in der Regel dazu, das Neue als Indikator für den Niedergang der Sprache zu interpretieren. Der „fehlerhafte" Sprachgebrauch in diesen neuen Medien hängt jedoch nicht unbedingt mit einem Mangel an Sprachkompetenz zusammen, sondern es werden ganz bewusst nähesprachliche Ausdrucksformen gewählt. Deshalb sollte man die internetbasierten Kommunikationsweisen eher als Ausdruck eines Sprachwandels, statt als Ursache eines Sprachverfalls interpretieren. Außerdem wurde festgestellt, dass die oben genannten Sprachphänomene wie Rückgang des Genitivs keine erst vor kurzem in Mode gekommenen Tendenzen sind, sondern dass diese Prozesse schon vor Jahrzehnten begonnen haben. Der Dativ ist somit keineswegs „dem Genitiv sein Tod."

Zusammenfassend lässt sich sagen, dass ein Richtig-oder-falsch-Denken nicht ausreicht, um die Frage nach gutem Deutsch zu beantworten. Ohne Grammatik wird man von den anderen nicht mehr verstanden und ohne ein situativ angemessenes Sprachregister fällt man aus dem Rahmen. Doch Normkonformität allein führt nicht in jedem Fall zu gutem Deutsch. Es mag paradox klingen, aber auch „falsches Deutsch" kann gutes Deutsch sein.